武田泰淳研究
――「審判」「蝮のすえ」を中心に――

栗田智昭

はじめに

武田泰淳は一九一二年（明治四五年）、浄土宗潮泉寺の息子として生まれた。そして僧侶であった経験を基に、小説を書く事になる。また、出兵した中国においてキリスト教の聖書に傾倒し、キリスト教にまつわる作品も執筆するようになる。そこから、仏教とキリスト教の二つの宗教に跨がった作家、戦争体験を小説化した作家として知られている。

武田泰淳が宗教者でありながら作家として大成したのは、多角的な目を持っていたからだと言える。宗教者は自らの属する宗教の教えを通してしか物事が見れなくなる傾向にある。必ずしもそうではないにしても、その宗教の知識が多く身についていることによって、自らの属する宗教の教えに言動や思考が傾いてしまうことは大いにある。だが武田泰淳は自らの属する浄土宗の教えに傾く事無く、広い視野で物事を見ている。そういった意味で、武田泰淳の作品は固定観念や一方的な物の見方にとらわれない作品であり、現在においても読まれ、研究される価値のある作品である。

ここでは仏教やキリスト教の教えのみにとらわれず書かれた作品のうち、特にキリスト教を題材とした「審判」、「蝮のすえ」について言及して行きたいと思う。これらの作品は、キリスト教を題材としてはいるが、正規のキリスト教解釈とは違っている。多くの論文では、作品で表される聖書の解釈が純粋なキリスト教的聖書の解釈から外れていることについて論じた上で、その変容の在り方を仏教の影響を受けたキリスト教としているが、はたしてそのように言えるのであろうか。

武田泰淳の評論には「滅亡について」がある。そこでは人や物、国の滅亡は平等に繰り返されるものだとされている。キリスト教を題材に取った作品にも「滅亡について」で述べられた主張が現れていると言える。本論では「滅亡について」の思想が小説の中でどの様に現れているのかについて論じていきたい。

さらに武田泰淳の文学史的意味についても他の作家と比較して検証したい。同時代に活躍した作家の中には武田泰淳と同じように、宗教を題材として小説を発表していった作家も居る。その代表は遠

「国文学試論」第27号　平成30年3月

藤周作などである。遠藤周作はキリスト教を題材とした作品を多数発表した作家であるが、遠藤周作がキリスト教を通して描こうとしたものは、「弱いキリスト」である。それに対し武田泰淳は悪人としてのキリストを描こうとした。それが何を意味するのか、また仏教という観点から見た時、武田泰淳は何を描こうとしたのかを検証し、総じて何が言えるのかを考察していきたい。

「審判」について

武田泰淳は宗教の「平等性」を常に意識していたと考えられる。それは仏教、キリスト教を扱ったどちらの作品にも現れ、様々な作品からその意識を垣間見ることが出来る。この事実は、作品を分析する上での重要な要素である。

その思想の根幹は「司馬遷」「滅亡について」を見れば明らかとなるため、ここで簡単に見ていきたい。

まず、武田泰淳が作家として評価を受けるきっかけとなった「司馬遷」では、ポウの言葉を借り「宇宙」と言う言葉が使われる。史記世界における国の盛衰のあり方を宇宙に置き換え「宇宙の聚合と消滅」としている。

さらに、「司馬遷」の中に込められた思想に戦争体験が加わって完成したものとされる、評論、「滅亡について」の中では、国や個人の滅亡は「平等」なものであり、どの国どんな人にでも起こりえることであるとし、世界の自然法則と変わらないと記している。「司馬遷」では国の盛衰を宇宙に例え、「滅亡について」では、宇宙の消滅と誕生のサイクルは人間にも平等に当てはまると考えていることが分かる。

一方で武田泰淳は、「平等」の考えを仏教やキリスト教などの宗教にも広げ、救済、罪、罰のあり方に当てはめた。

仏教作品の中では、作品を通じて衆生の救済のためには「平等」こそが最重要なものであると同時に、仏教の理想的あり方であるという主張をした。同時に罪や罰も「平等」でなければならないが、キリスト教作品では現実に罪はあっても罰は「平等」ではないのではないかと問いかけている。武田泰淳研究で重要視される「滅亡」の考え方は「平等性」を内包し、武田泰淳作品の根幹を成すものであると言える。そこで、武田泰淳の作品においてキリスト教について取り扱った作品の一つである「審判」を見ていくことで、描こうとしたキリスト教観が「平等」であったのかを検証して行きたい。

そこで取り上げたい作品が「審判」[1]である。「審判」はキリスト教の影響を受けた作品と言われるが、作品を見ていく前に武田泰淳のキリスト教観を見てみたいと思う。それによって武田泰淳はキリスト教をどのように解釈し、作品に反映して行ったのかを明らかにしていきたい。

武田泰淳のキリスト教観について、寺園司氏は「特異なキリスト教観」、「正統的なキリスト教からみれば異端ともなる考え方」[2]としている。その理由は仏教の影響を受けたとする説が多い。戦争、敗戦を経験した武田泰淳は次のようなことを考える。

古い古い『旧約』の記録が、なまなましい「現実」となって

私の眼前に、あざやかにうかび上がった。

その第一は「黙示録」の予言。あの予言には、七人の天使の吹き鳴らす七つのラッパの音につれて、次々に「悪しき民」の頭上に落下してくる災厄がのべられている。日本列島の町々を焼きはらった爆撃より、もっと徹底的な、もっとすさまじい、もっとしつような大破壊、大破滅のありさまがことこまかに描かれてある。（中略）私はまず「黙示録」が、はるか昔に描写しておいてくれた滅亡の姿を、何回もくりかえし味わっては、自分の現在立っている位置・地点を確かめようとした。「滅亡」という人間の限界状況がそのときの私には、なにより身近な、親しみのある問題のように思われたのである。それと同時に「すべての物は変化する」という仏教の定理が、新鮮ななぐさめとして思い出されてきた。滅亡とは、この「変化」の一つのあらわれにすぎないのだゾ、と自分にいいきかせた。[3]

（棒線は引用者による。以下同じ。）

武田泰淳は戦中、戦後の日本の様子に聖書の黙示録の様子を重ねて考えている。そしてその様子を「滅亡」と呼んでいるが、その考えは聖書的「滅亡」にとどまらず、仏教と結びついている。そういった点が、「特異なキリスト教観」と呼ばれる所以である。

前述したように、武田泰淳はキリスト教の中に「滅亡」を見ていることが分かる。ここで「滅亡」とは如何なる思想であるのかを見てみたい。

滅亡は私たちだけの運命ではない。生存するすべてのものにある。世界の国々はかつて滅亡した。世界の人種もかつて滅亡した。これら、多くの国を滅亡させた国々、多くの人種を滅亡させた人種も、やがては滅亡するであろう。滅亡は決して詠嘆すべき個人的悲惨事（中略）ではない。もっと物理的な、もっと世界の空間法則にしたがった正確な事実である。星の運行や、植物の成長と全く同様な、正確きわまりなく、くりかえされる事実にすぎない。世界という、この大きな構成物は、人間の個体が植物や動物たちの生命をうばい、それを（中略）嚙みくだきのみくだし、消化して自分の栄養を摂るように、ある民族、ある国家を滅亡させては、自分を維持する栄養をとるものである。

戦争によってある国が消滅するのは、世界という生物の肉体のちょっとした消化作用であり、月経現象であり、あくびでさえある。世界の胎内で数個あるいは数十個の民族が争い、消滅しあうのは、世界にとっては、血液の循環をよくするための内臓運動にすぎない。[4]

前述したように、武田泰淳のキリスト教解釈は「滅亡」の思想と密接に関わっている。そして「審判」の中でも敗戦後の日本の様子を、黙示録の大災害が降り注いだ後の様子に例えている。

私は雨の多い八月を、その聖書を読んで暮らした。そして「黙示録」まで読みすすみ、七人の天使が吹き鳴らすラッパに

つれ、地上に降下する大災厄の段になると、これこそ日本の地上に現実に降りかかっているものだと感じた。ことについこの間の原子爆弾の恐怖が古い文字となってマザマザと示されているように思われた。（中略）

黙示録の描写はそっくりそのまま今の日本にあてはまることを新しい発見のように感じた。国土破滅などは歴史上何回でもくりかえされる、その一つにすぎない。

「滅亡」の思想を通して見た敗戦後の日本の状況を黙示録に当てはめ、その上で国の「滅亡」は歴史の中で何度でも繰り返されることとして表現している。また、国は一つのエネルギーであり、一つの国が滅びると、そのエネルギーを受け継いだ新しい国が勃興してくると主張している。

友人などは、ある日、エネルギー不滅説のような議論を持ち出したことがあった。（中略）

つぎからつぎへと個々の国々が亡ぶことによって、この人類全体の世界は支えられ、つづいているんだからな。一国が亡びることは、それだけのエネルギーの消滅のように見えるが、実は人類全体のエネルギーは不変不滅なのさ。それは物理的に見て、宇宙のエネルギーが不変不滅であるのと、ちょうどおんなじなんだ。

この文を見れば明らかなように、「審判」では聖書の文を「滅亡」の思想を用いて解釈している。ここまでで「審判」は聖書、「滅亡」が融和して完成した作品だということが分かった。しかし、「審判」の主題は単なる聖書の「滅亡」的解釈では終わらない。

作品の舞台背景は戦後の中国である。終戦直後、「私」は中国に残留し日々を過ごしていた。「私」の友人である「二郎」は、「私」に別れを告げる手紙の中で自分が戦場で犯した殺人について語った。その殺人は「法の裁き」の無い場所で、人間は如何なることをするのかという「実験」でもあった。法が適用されない状態に置かれた「二郎」の頭には、「人を殺すことがなぜいけないのか」という思考がよぎる。「私」と会っていた間、「二郎」はしきりに「裁き」を気にしていた。キリスト教的罰がこの世界に存在するのか、また罰は平等なのかということがこの殺人では問われている。民間人が通り過ぎた後、「二郎」は上官の気まぐれな命令に従い、実験を実行した。また、子供の頃にガマガエルを空気銃で撃ち殺したことを語る。その理由としては、やはり「滅亡」に似た思想があった。

その頃、物理化学をならい、物質はすべて原子でできているという理論が強く私の頭を支配したのです。つまり原子に還してしまえば生物も何もない。神聖なる生も微粒子に分解すれば単なる物だという考え、それが私には私流な影響をあたえました。

国や個人が滅んでも、新たなエネルギーとなるという「滅亡」の思想が、殺人にも適用されている。さらにガマガエルを撃ち殺した

際には、「自分の定理を試すかのように」して殺している。ここからも「二郎」の殺人が「実験」的要素を含んでいることが分かる。そして最後の殺人は、日本軍が焼き払った村落で、炎がくすぶる中で逃げ遅れた「盲目」の「老夫」と、「つんぼ」の「老婦」の夫婦だった。どうせ死んでしまうと考えた「二郎」は、「老夫」を撃ち殺した。その後は、「ある定理を実験したような疲労」が「二郎」の上にのしかかった。「二郎」の殺人は、キリスト教の教義から来る物理的罰はあるのか、「滅亡」が生物に訪れる時とは一体どのように訪れるのかという、二つの「実験」的要素に集約される。だがこれらに共通することは平等ということである。キリスト教の罰と救いは平等であるとされ、「滅亡」もまた、誰にも平等に訪れるという主張である。

そして戦場で殺人を犯し、終戦を迎えた「二郎」は「鈴子」という女性と婚約した。しかし、「鈴子」を愛していたからこそ、恐怖を感じたのである。

> 私は、あの老夫婦のように自分たちもなるのではないかという気持ちにギュッとつかまれました。（中略）足音がきこえ、人声がする。どこかほかの国の兵士がすぐそこまで来ている。しかし私は身うごき一つできずに慄えている。すると、かつての私とよく似た外国兵士は何の気なしに銃をとりあげる。（中略）
>
> 鈴子のことを考えた場合、サッと冷水をあびせられる感じがしました。それは私をおびやかす力がありました。

そのことを「鈴子」に話し、お互いに疲れ果てた結果、「自分が裁かれたのだと悟」り、「罪の自覚だけが」救いなのだと考える。そう考えた「二郎」は、「自分の裁きの場所をうろつくことに」した。中国に残留することは、罪の意識の中で生きて行かなければならないという罰と、自分は罪の意識を持てる人間なのだという救いの同居ということである。つまり罰も救いも精神的なものであり、「二郎」はキリスト教の罰と救いに物質的なものを想定していたが、実際は違ったということを描いていると言っていい。罰と救いは精神的なものであるという答えが出たが故に、それらは誰にでも平等に訪れるものであると言え、『審判』の根底には平等論が横たわっていると言える。

「蝮のすえ」について

「蝮のすえ」は「審判」と共通する設定が散在している。またその冒頭は、「生きて行くことは案外むずかしくないのかもしれない」[5]という一文から始まるが、この言葉に注目しながら展開して行こうとする論は多い。日本が戦争に敗北した後の中国に滞在し続ける日本人は、敗戦国に属する人間であるが故に、世界的な悪人の烙印を押され、さらに母国と切り離された異国の地に取り残され生きて行かざるを得ない状況であれば、「生きていくことは難しい」と語ることが普通である。それ故にこの冒頭は異端であり、多くの論者に注目される所以であると考えられる。

この一文が、ある種異常であることについて、どのような意図が込められているのか、武田泰淳自身の言を見てみたいと思う。

戦争がすんだ時に強烈な考えがきた。（中略）
いよいよダメになった自分というものが俎の上に乗っかった。その俎は相当大きくて強い光線が当たっているから、乗せられた自分の形が、大げさにいえば「世界的な規模」でわかってきた。（中略）それが『蝮のすゑ』とか上海ものの基底になっている。つまり、自分が精神的な最下位にいて生きてゆく。これはほとんど無意味なわけなのだが、しかしそんなものでもいったん表現されると意味が生れる。（中略）
終戦後の外地の日本人は、生きてゆくことがむずかしい状態にあるわけである。それを最初から「生きてゆくことは案外むずかしくないかもしれない」というように書いてしまうと、なんとなく今日まで身に着けていた「文学的」な抒情的な着物がすっかりなくなってしまって、なにかいうたびに一つ一つナマの言葉で出てきそうな気がする。(6)

この言から分かるように、武田泰淳自身も、「生きていくことは案外むずかしくないのかもしれない」という一文を用いることによって、作品にリアリティを持たせることを意図していると同時に、「最下位」で生きる者の心理を表現しようと試みていると言える。それが分かったところで作品に目を向けると、主人公杉は、周囲の出来事に不感症の人間として登場する。「恥を忍んで生きている」気でいたが、実際のところ代書業という職業を見つけ、「人の不幸で金をかせぐ」ことに何の感情も反省も起きなくなり、遊んでいるに等しい生活でも暮らしが成り立つことに起因していると言える。中国に滞在する日本人が、敗戦の外国という物質的にも精神的にも摩耗した状況に比べて、「恥」の感覚も薄れ、生活にも不自由しない杉には、「敗戦後の中国」という問題は、周囲の人間達が感じるような切迫した、切実な問題になり得ないからである。だが、「蝮のすえ」という作品は、何事にも不感症な杉の変化によって物語が進行して行く。
また、杉は不感症ながら「生きていくには守護神が必要なのだ」という考えを持つ。本節ではこの命題が、変化して行く杉の在り方を取り巻き、どの様な意味を持つのかということについて言及して行きたい。
戦前良く勉強し、良く考える人物だった杉は、戦後何をするでも無く過ごしていた。しかし代書業のおかげで、周囲からは「価値ある人物」として認められるようになる。そして「被銃殺者」という題で詩を書いていた杉に一人の女が尋ねてくるが、この詩の創作について清原万里は次のように書いている。

〈私〉は「被銃殺者」なる詩を書いているのであるが、ドイツの戦犯が銃殺される場面について、〈「えーと。上半身が前へ倒れた！と。何故倒れたのでしょうか、と。引力の法則によってか、と」〉といった言い方をする詩の内容であり、そこには、このときの〈私〉のもっている無責任さ、傍観性が色濃くあら

われている。[7]

そんな杉に女は代書の依頼をし、杉はそこで彼女の夫が病の床に伏していることを知る。その女は、日を改めて代書の礼を言いに来た。そこで「ちょっとお話ししたいことがあるんですが」と言い、杉は彼女を自室に入れる。そこで女は夫が使われていた辛島に抱かれたという告白をした。

そしてそのことを夫は知っていた。辛島が女に金銭を渡したことも知っていた。夫は辛島の金で生活をすることを拒んだが、その金なしには生活が成り立たなかった。そして「お前は憎いが、しかし可哀そうだ」とつぶやいた。また、夫が会いたがっていると話し、杉は次ぐ日に来訪することを約束して女を帰らせた。この時、杉は「興味は充分にある。しかしいずれにせよ、そのまま放っておいて、すむことであった」と考えていることから、傍観者的性質は保たれたままであることが窺える。

女の家を訪ねると、夫は妻が辛島を憎んでいるという嘘をつくと言い出し、妻と言い合いになる。しかし、杉は女と夫から頼りにされているという言葉を受け、家を去る。

しばらくしたある日、女が杉の家を訪ねる。その際彼女は杉に「愛してくれる？　わたしは、あなたをあいしてるのよ」「愛してるのね」という問いかけをする。私はその問いに対して肯定の返事をする。この場面から、傍観者として世界を見ていた杉は、女、夫、辛島の愛憎の渦中に入り込んでいくことを決めたと言え、愛憎という感情の中に身を置くことは俗的な思考へと変貌したことの証明であり、全ての事象から距離をとっていた傍観者から自らの行為が物事を動かしていく当事者へと変質したと言える。ここまでのことから「生きていくには守護神が必要なのだ」という言葉を考えると、表面上女と夫にとっての「守護神」、言い換えれば生きる「拠り所」は杉であり、杉と辛島にとっての「拠り所」は女であると言える。

杉が当事者へと変質したところで、女は辛島が杉のところへ来ようとしていたことを明かす。その理由として、女は自分が杉を頼りにしていることに気付いたからだと言う。また、杉に辛島を殺せるかと聞く。そこで杉は次のように考える。「生きていることは、何等かの意味で、強さと関係していた。生きることは生き残っていることであった。それは何等かの形でその生命の強さの結果であった。私は生存のために生存しているだけであった。しかし生存者である以上、たぶん強さを欲し、それにあこがれていたのではないか。」この思考から考えれば、「拠り所」は強者になるのである。辛島を殺せるかという問いを発したことは強さであるし、現段階の辛島は彼らの関係性の中においても権力の面から見ても強者である。辛島と私の強さについて、服部一希は次のように書いている。

この人物が存在するかぎり奴隷的境遇に踏みとどまるほかない屈辱と悲惨から一組の旧商業ブルジョアジーの夫婦を救済することは、この人物をこの世から追放し、自分が代わりにその男の役目を引き受けることを意味する。なぜなら、驚くほど権威主義的なこの男は、おのれの権限を侵害する人物は容赦なく追放する構えであるし、人妻は、杉が辛島の役割を引き受ける

ことを望んでいるからだ。[8]

夫婦は辛島の手から女を奪い返すことを望んでいると同時に、辛島の幇助に拠り所を見つけているのである。杉が夫婦を辛島の手から解放したとしても、杉と女に関係が出来てしまった時点で、杉が辛島の立場を引き継ぐことになるのである。さらに、女がこの時点で夫を裏切り杉に「愛してるのね」と確認をすることは、夫を裏切るだけの強さを持った人物として捉えることが出来、一見強者である辛島が女を求めることも、生きる拠り所として強者を求めるという論理に合致する。それは旧正月を迎え、衛兵に叱られた際の考えを述べた次の一文からも読み取れる。

生きていることは、何等かの意味で、強さと関係していた。生きていることは生き残っていることであった。それは何等かの形でその生命の強さの結果であった。[9]

そして杉は夫に会いに行き、話しをする。その際に夫は日本に帰れることが決まったこと、また、妻が日本へ帰ったら『『別れて』』と言ったことを打ち明けた。また、杉に日本へ着いてきて欲しいことを伝えると同時に、女と杉に関係があるかということを確認され、杉はそれを認める。

女が病人である夫に対し、『『別れて』』と言い放ったことは、夫を弱者と見なしたため、捨てることを決め、杉という辛島に変わる強者を求めたのだと言える。そしてこの時、女と杉の関係が夫にも認識されることとなる。

ある日、杉は辛島に呼ばれる。指定された酒屋へ入ると、辛島はAという青年と喧嘩をしていた。Aを腕力でねじ伏せる辛島はこの場合強者の段階にあると言える。そこで辛い島は自分は死刑になる人間だと主張する。

俺は死刑になる。それは天罰だ。天罰でなくてもいい。しかし罰だ。つまり世界の罰だ。そうしておいて、一向さしつかえない。だが、俺を罰したところで、すまんよ。すみはせんよ。俺はまた生まれかわってくる。たぶん同じ日本人として生まれかわってくるんだからな。[10]

この予言は後になって意味を帯びてくるが、この段階においても辛島が「蝮のすえ」と呼ばれる、罰が下されるべき存在であることを示している。辛島と別れてからしばらく経ち、女と会った私は、彼女が以前辛島を殺せるかと問うたことを思い出し、夫婦を解放するために辛島を殺しに出かける。だが杉が辛島を手にかける前に、彼は何者かによって致命傷を与えられた。女の夫と同様に死に接近した辛島はここで弱者に変わる。そこで彼は死に際に女の名前を呼ぶ。これは弱者である辛島が強者である女を求めていることになる。

辛島の死を見届けた杉は夫婦と共に日本へ向かう船に乗る。その船の中で、女は日本まで命が持たないであろう夫が杉に「嫉妬」していることと、自分が人を使って辛島を殺したことを話す。ここで

杉は自分が今まで辛がいた立場に立ったことを自覚すると同時に、人を殺すことが出来る女の強さが強調される。鎌田朋美は杉について次のように述べている。

病人は杉の罪深さを知っている。人を殺した罪を隠し、病人が死んだ後も平気で生き残り、何の罪を犯さなかったかのように、〈彼女〉と一緒に生きようとしている。しかも、帰国船には、病人の付きそいとして乗船している。まるで、病人の体を気遣うかのように、である。病人の言葉は、杉に自分が偽善者であることを確認させたのである。まさに、杉は、この作品の題名である「蝮のすえ」である。[11]

この作品においては強者のみが生き残る。強者は偽善者であり、「蝮のすえ」と言う偽善者、罰せられるべき存在、は滅亡と勃興を繰り返している。罪と罰は平等に与えられ、繰り返すのである。これは「審判」についてで引用したように、「滅亡について」で述べられた、宇宙の循環に値する。つまりキリスト教的罪と罰も、人間の歴史である以上宇宙の現象のように循環するのである。キリスト教的罪と罰を描くことによって、抽象的であった「滅亡」の思想に形を与えて示しているのだと言える。

結論

本論では武田泰淳のキリスト教的側面を描いた、「審判」、「蝮のすえ」の主題を見てきた。ここでそれぞれの作品ごとの主題を確認してみたいと思う。

「審判」では、日本の敗戦後の中国に残留する「私」の友人が言った「国土破滅」の平等性から、「滅亡」の平等性が表されていると言える。また、二郎からの手紙の中では「罰」という意識が示されることになる。

「蝮のすえ」では、拠り所としての強さが表される。それと同時に強者の滅亡の繰り返しが同時に描かれていることが分かった。

以上のことから、「審判」、「蝮のすえ」の二作品に共通して言えることは、「滅亡について」で表された滅亡論を、宗教的思考或いは実社会における人間の営みにあてはめた時、どの様な思考、生活が生まれるのかを表した作品であると言える。そこに仏教の影響を受けたキリスト教があるにせよ、作品の目的は滅亡論を実生活にあてはめた場合の考察なのである。武田泰淳の滅亡論は、「滅亡について」で書かれているように、全ての物に訪れる平等な滅亡なのである。仏教の救いに関して、武田泰淳は平等でなければならないと考えていたが、実際の浄土宗の救いは見方によっては平等ではない。そこから平等な救いの方法を模索していたと言える。そのような思考の中にあって生まれたものが「滅亡について」で書かれた滅亡観なのである。

「滅亡」という思考を持った時初めてもたらされる万物の平等性は、盛衰の「詠嘆」を退け、悲観すべき問題を自然現象として捉える目を与える。悲観からの解放は、救いとも考えられ、平等な救いをもたらすことの出来なかった既存の浄土宗の教えに対し、盛衰を

「自然現象の一部である」という科学的な見方で捉え、折り合いを付けることで新しい救いを見出すという新しい救いの在り方を提示して見せたという点で、武田泰淳の小説が大きな意味を持っていると言える。

同じように、宗教を小説の題材としながら既存の宗教の考え方とは違う方法で新たな救いを提示してみせた作家として遠藤周作などが挙げられる。遠藤周作が題材とした宗教はキリスト教であるが、遠藤周作が描いたキリスト像は「弱いキリスト」であり、絶対的な救い主であるキリスト像、いわば強いキリストを崇拝していたそれまでのキリスト像の教えとは正反対のものであった。

武田泰淳が遠藤周作との対談の中で言っているように、文学的キリスト像が「弱いキリスト」までは来た。しかし武田泰淳はその先のキリスト像を望んでいたことが、同じ対談の中での言から分かる。仏教の救いに新たな見地を提示してみせた武田泰淳であるが、キリスト教に対しても新しい解釈を表そうとしていた。本論では扱わなかったが、同じキリスト教を題材とした作品の「わが子キリスト」について、悪人としてのキリストが描きたいと言っていることからは、人間誰しもが秘めている悪人になり得る暗い面に寄り添うキリストを描くことを目的としていたのだと言える。それはキリストとなったローマ人と、その他の作品の登場人物の一面は、非人道的な面を持っているという点において一致する。キリストになり得た人間とキリストではない俗人が共通して非人道的な暗い面を持つということは、キリストもまた暗い面を持つ一人の人間であることの証明である。そこから俗人に寄り添うキリスト像が生まれ、それは新たな救いになり得ると言える。仏教だけでなくキリスト教においても新たな救いを提示して見せたのだと言える。

このようなことから、武田泰淳が宗教を題材にとっているからと言って、その宗教の教えを写し取りたかった訳では無いことは明白である。宗教の教えという一つの設定を題材として取りあげ、その設定に独自解釈を付与して作品を描くことによって、新たな思想を描き出そうとしていたのだと言える。この描き方がされている以上、武田泰淳の作品からは仏教やキリスト教という一つの宗教にとらわれた見方を捨て、宗教そのものの描き方という大きな概念で見るべき部分が大いにあると言える。

【注】

(1)「審判」『批評』四月号（創元社、一九四七年四月一日）初出、『武田泰淳全集第二巻』〈筑摩書房、一九七八年二月十日〉所収

(2)寺園司「武田泰淳論―キリスト教的側面について―」（『青山語文』第九号　青山学院大学日本文学会、一九七九年三月一日）

(3)「限界状況における人間」『毎日宗教講座・1われらはいかなる人間であるか』（毎日新聞社、一九五八年一月二十二日）

(4)「滅亡について」『花』第八号（新生社、一九四八年）〈『武田泰淳全集第十二巻』（筑摩書房、一九七九年一月二十日）〉所収

(5)「蝮のすえ」『進路』（思索社昭和二十二年八月号から十月号）〈『武田泰淳全集第二巻』（筑摩書房　昭和四十六年六月十八日）〉所収

(6)「私の創作体験」『現代文学（2）創作方法と創作体験』（新評論

社　昭和二十九年八月三十日）

（7）清原万里「「蝮のすえ」論―「罪」の問題をめぐって―」『近代文学試論第二十五号』（広島大学近代文学研究会　昭和六十二年十二月二十五日）

（8）服部一希「「蝮のすえ」論」『日本文學誌要　第四〇号』（法政大学国文学会　昭和六十四年）

（9）「蝮のすえ」『進路』（思索社昭和二十二年八月号から十月号）〈『武田泰淳全集第二巻』（筑摩書房　昭和四十六年六月十八日）〉所収

（10）注（9）に同じ

（11）鎌田朋美「『蝮のすえ』の構造―誰を方舟に残すか―」『愛媛国文研究　第四十六号』（愛媛国語国文学会　平成八年十二月二十日）